日本産 *Gypsonoma* 属 2 種の記録

奥　俊夫

果樹試験場盛岡支場
〒020-01 盛岡市下厨川鍋屋敷

舘山一郎

〒064 札幌市中央区南12条西18丁目

Records of Two *Gypsonoma* Species from Japan

Toshio OKU: Fruit Tree Research Station, Morioka Branch, Shimo-kuriyagawa, Morioka, Iwate, 020-01 Japan

Ichiro TATEYAMA: Nishi 18, Minami 12, Chuo-ku, Sapporo, 064 Japan

Gypsonoma 属のハマキガ類は日本から 9 種が記録されているが，筆者らはさらに 2 種を発見したのでこの機会に記録にとどめておきたい．これらの種はまた，筆者らの知る限りでは極東からも新記録のようである．

稿を進めるに当たり，貴重な標本を提供せられた北海道立林業試験場の上条一昭博士及び北海道大学農学部の久万田敏夫博士に対して厚く謝意を表する．また，ここに使用した標本の一部は旭川開発建設部の依託による国道39号線武華地区自然環境現状調査において得られたものであり，関係各位に対し御礼申し上げる．

Gypsonoma oppressana (TREITSCHKE)

(図 1)

Paedisca oppressana TREITSCHKE, 1835, Schmett. Eur., **10** (3): 95.

Steganoptycha oppressana: STAUDINGER et REBEL, 1901, Cat. Pal. Lep. **2**: 110.

Semasia oppressana: KENNEL, 1913, Pal. Tort.: 489.

Gypsonoma oppressana: PIERCE et METCALF, 1921, Genit. Brit. Tort.: 78; MEYRICK, 1928, Rev. Handb. Brit. Lep.: 539; HANNEMANN, 1961, Teirwelt Deuts., **48**: 150; BENTINK et DIAKONOFF, 1968, Nederl. Bladrollers: 126; KUZNETZOV, 1978, Opred. Nasek. Eur. SSSR, **4**: 506; BRADLEY et al., 1979, Brit. Tort. Olethreutinae: 152.

所検標本　北海道：美唄市（林試），1♂1♀，1964年 6 月12～15日羽化（上条飼育）；恵庭市，3♂1♀，1964年 7 月 7 日（久万田採集）；上川町ルベシナイ，2♂，1982年 9 月12日（舘山採集，自然環境調査）．

成虫の開張は約 14mm，前翅は細長く，その外縁は緩かな弧状に曲がり，翅頂下で凹まない．前翅の地色は淡灰色，斑紋は暗灰色，全面に暗色の鱗片が散在するため，斑紋と地色のコントラストは強くない．基部 1/3 を占める暗色部は特に濃色であるため，それに外接する淡色部が比較的目立つが，その幅
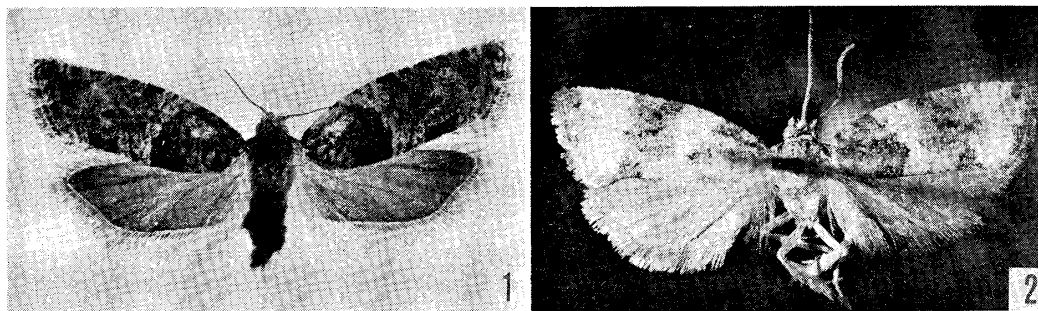
図 1-2.　日本新記録の *Gypsonoma* 2種.　1: *G. oppressana* (TREITSCHKE).　2: *G. sociana* (HAWORTH).

は狭い．後翅は灰褐色，基部に向かって淡色となる．体は褐灰色～暗灰色．

上記標本をドイツ Aschersleben 産の1♂と比較したところ，前者の外観は全体としてより暗色な傾向があったが，それ以外に特別な差異は認められない．本種は，日本に産する同属の他の種から，前翅が細長くその外縁が翅頂下で凹んでいないこと，及び翅外半の斑紋が不鮮明であることによって容易に識別できる．

上条氏によると，老齢幼虫は5月上旬にポプラの新芽を食害し，同月下旬頃に蛹化，6月中旬以降に羽化したという．上記の採集記録からみると，低地で7月上旬に成虫が得られており，上条氏の飼育結果にほぼ一致するようであるが，一方，標高 800m 内外のルベシナイでは9月上旬に古い成虫が採集されているので，山地では羽化が遅れるものと推測される．なお，ルベシナイの採集地点ではドロノキの群生が認められるので，これが寄主植物となっていると思われる．ヨーロッパにおいても，ポプラ類が寄主として記録されている．BRADLEY *et al*. (1979) によると，夏に産下された卵は間もなくふ化し，若齢幼虫は葉の下面の主脈付近を食した後，樹幹の粗皮下に潜伏して越冬するという．蛹化場所は地面の枯葉下などであるといわれるが，樹上の粗皮下で蛹化するという記録もある．

北海道中央部では前記のように低地から山地まで広く発生しているようであるが，札幌市内のポプラからはまだ発見されておらず，また，本州からも未記録である．海外では英国を含む中部ヨーロッパ全域，イタリア北～中部及びソビエト連邦のヨーロッパ地域から記録がある．

Gypsonoma sociana (HAWORTH)

(図2)

Tortrix sociana HAWORTH, 1811, Lep. Brit.: 434.

Gypsonoma sociana: MEYRICK, 1928, Rev. Handb. Brit. Lep.: 539; HANNEMANN, 1961, Tierwelt Deuts., **48**: 150; BENTINK, et DIAKONOFF, 1968, Nederl. Bladrollers: 126; KUZNETZOV, 1978, Opred. Nasek. Eur. SSSR, **4**: 506; BRADLEY et al., 1979, Brit. Tort. Olethreutinae: 149.

Penthina neglectana DUPONCHEL, 1844, Hist. Nat. Lep. Fr. Suppl., **4**: 509.

Semasia neglectana: KENNEL, 1913, Pal. Tort.: 496.

Gypsonoma neglectana: STAUDINGER et REBEL, Cat. Pal. Lep., **2**: 112; PIERCE et METCALF, 1921, Genit, Brit. Tort.: 78.

所検標本　本州：岩手県，盛岡市，1♂，1965年6月13日（奥採集），1♂，1979年6月21日（奥採集）；大迫町（早池峰河原坊），1♂，1978年6月29日（奥採集）．

成虫の開張は 13mm 内外であるが，かなり個体変異が大きい．前翅幅は中程度，前縁はほぼ一様の弧状に曲がり，外縁は翅頂下でやや凹む．前翅の地色は乳白色，斑紋は灰褐色，基部暗色斑，中央斜帯及び翅頂の小暗点を除いて，地色が広く露出している．後翅は淡灰褐色．体は褐灰色，顔面はやや白味

を帯びることがある.

調査標本は，ヨーロッパ産の個体の記載とは異なり顔面が鮮かな白色を呈しないが，他の点ではほとんど差異を認めないので本種と同定した．あるいはヨーロッパと日本との間で亜種的な分化が起こっているかもしれないが，上記の3♂を検したのみのため，この点は今後の問題として保留する．日本産の既知種の中では *G. ephoropa* MEYRICK に近似するが，*ephoropa* では前翅の前縁が基部近くで特に強く曲がる傾向があり，また翅外半部は地色が裸出せず，鉛色や褐灰色の鮮片による雲状紋を伴う点が異なっている.

現在まで前記3個体を得たのみであり，生活史は不明であるが，採集地点はいずれもヤナギ類が密生した場所であった．ヨーロッパの *sociana* はヤナギ及びポプラに寄生し，英国，オランダ，ドイツ，オーストラリア及びソビエト連邦の一部から記録されているが，発生地は局限される傾向があるという．ヨーロッパにおける生活史は前記の *oppressana* とほぼ同様であるが，若齢幼虫が秋に寄主の葉柄に食入し，葉を枯らす点が特徴的である (BRADLEY *et al*., 1979).